

# 杉浦 栄治さん

## 中山間地域の水田農業を若者で守る 畔の草刈り欠かさず農地集積率90%

岐阜県恵那市  
株式会社岩村営農代表取締役



傾斜地が多く田んぼ1枚の面積の

狭い、中山間地域の農業を守るの

容易ではない。岐阜県恵那市の岩村

営農は、畔の草刈りを徹底すること

で元農家である地主の信頼を得て農

地を集積。機械化やGAPを導入す

るためスマート農業を活用し、土日

は完全に休む勤務体制を確立して、

女性や若者を社員として呼び込み、

地域農業を守っている。

富田川が流れ、岐阜県内でも有数の

米どころとなっている。

地域には480鈔ほどの農地があ

るが、水田面積は約300鈔。高齢

化が進んでいて、後継者のいない農

地や条件の悪い農地は、近い将来耕

作放棄地となる可能性が高い。この

ため、三つの集落営農組織が地域農

業の担い手として利用権設定による

農地集積を進めている。

### 集落営農組織が担い手

——岐阜県恵那市の旧岩村町周辺は、

中山間地域で、特に水田農業の経営

は厳しいですね。

杉浦 岩村地域は岐阜県の南東部

に位置し、標高が約500メートル、7割

が山林の典型的な中山間地域だ。木

曾川の支流である岩村川、飯羽間川、

今も心配な部分ではあるが、現在

### 畔の草刈りはきっちり

——岩村営農の事業規模は、どのく

らいですか。

杉浦 耕作面積は、水田70鈔。他に

大豆の畑が1鈔ばかりあるが、事実

上、水田だけ。70鈔のうち岩村地区

で45鈔、残りは隣の山岡町などで25

鈔耕している。岩村地区での水田の

農地集積率は90%にのぼる。

ちなみに、飯羽間営農は約70鈔で、

農地集積率は60%程度、富田営農は

約60鈔で集積率は40%程度だと思っ

自分です。自分で米作りをしてきた農家も、

高齢になってくると、岩村営農に作

業を頼むようになる。岩村営農が利

用権を設定している水田の地主は

100人を超える。

「農地を買ってくれ」という人も

出てきているが、買わないことにな

っている。一人から買えば、売りが

る地主が続出して他の人からも買

ざるを得なくなる。登記の手数料だ

だけでも膨大な額になり、農地を

買うだけの金がない。

——地代はいくらですか。

杉浦 基本的にはゼロ。耕作してい

る70鈔というのは、田んぼの枚数に



岩村宮農の全社員。前列右から2人目が代表取締役の杉浦栄治さん=岐阜県恵那市岩村町の本社前で

すると5、2、4枚にのぼる。中山間地域であるこのあたりの田んぼ1枚の面積は小さい。当社の場合、平均で15<sup>ア</sup>程度。一番大きくて40<sup>ア</sup>、一番小さいのは200平方<sup>ア</sup>足らずのところもある。地代を払って、やっていける営農条件にない。

その代わり、畔の草刈りは、きっちりやっている。年に1、2回しかやらない農家もあるが、当社は5、6回草刈りをしている。特に民家のある周辺の田んぼでは、丁寧刈っている。

米作りができなくなっても、地主にとつて、自分の田んぼの畔が草ぼうぼうでは、近所にみっともなく、暮らしていけない。きちんと草刈りをしてくれるところに貸したがるもの。だから、当社に田んぼを使ってくれと頼む農家が多い。

——傾斜のきつい水田では、法面のりめんが広くて草刈りがたいへんなのではないですか。

杉浦 そういふ条件の悪いところは、お金をもらっている。10<sup>ア</sup>当たり1万円とか2万円だ。お金をもら

っている水田面積は、全部で2<sup>ヘクタール</sup>ぐらいで、そんなに多いわけではない。——お金を払ってまで、水田を貸す農家がいるなんて、驚きです。

杉浦 もちろん、お金を払ってまで田んぼを預けたくないといって、荒らしたままの地主もいる。そうした農地は、たいてい山ぎわにある水田だったり、近所に住宅のない水田だったりする。

## 週休二日で地域並み給与

——従業員に女性や若者が多いと聞

### Profile

すぎつらえいじ  
岐阜県恵那市岩村町出身。64歳。岐阜県立岩村高等学校、岐阜県農業大学校卒業。地元の恵那農協（現東美濃農協）に入り、旧岩村町内の集落営農の組織化や農地の集積に尽力した。農協を中途退職し、2019年5月から、株式会社岩村宮農の代表取締役。趣味は地元河川でのアユ釣り。

### Data

株式会社岩村宮農  
2006年4月に集落営農組織として発足、08年5月株式会社に。経営面積は70<sup>ヘクタール</sup>で、ほとんどが水田。岩村地区での農地集積率は90%にのぼる。21年の第50回日本農業賞で、集団部門の優秀賞を受賞。本社は岐阜県恵那市岩村町。資本金300万円。常勤の従業員は役員を含め8人。土日は休みで、土日に働く「草刈り応援隊」のアルバイト登録者は17人。

きました。

杉浦 常勤で働いている人は、役員を含めて全部で8人。女性が2人、男性は20歳代と30歳代がそれぞれ2人ずつ。それに50歳代1人と、60歳代の私で、平均年齢は40歳代と若い。

若者の前職は、フリーターや、ワーキングホリデーで海外に行っていた者、農協に勤めていた者など、さまざま。知人の紹介だったり、社員募集のチラシを見て応募してきたり、採用のきっかけもさまざま。来年は、農業大学校を出た若者を採用する。

——なぜ若者を採用できるのですか。

杉浦 若者がいると若者を呼ぶのかもしれないが、勤務体制とか給与などの労働条件がいいからではないか。土日は必ず休みにしており、田植えや稲刈りなどの農繁期でも、土日は休む。私自身、農閑期の冬に長い休みをくれたとしても、春と秋の農繁期に休みなしの職場では働きたくないと思うからだ。

——水田農業で常勤の社員を抱えていると、冬場の農作業のない時期には、どんな作業をしているのですか。

杉浦 用水路や農道などの改修作業に携わっている。国の多面的機能支払交付金の対象事業となるので、それを給与の原資に充てている。

給与水準は、この地域である東美

濃地方の勤労者世帯の標準的な年収を参考に決めていく。他の職場と比べて安くはないはずだ。

### 土日は「草刈り応援隊」

——草刈りを年に5、6回もやると、広い面積をこなさきれないのでは。

杉浦 土日のみ、「草刈り応援隊」を組織して、彼らにアルバイトとしてやってもらっている。近年では、草刈り応援隊として働いている人のついで人が集まるようになっていく。

自動車部品会社などで働いている30〜40歳代のサラリーマンがほとんどで、恵那市内の人もいるが、遠くは愛知県豊田市などから参加してもらっている。現在、登録者は17人いるが、その中から都合の付く人、常時15人程度に来てもらっている。

勤務時間は、朝5時ごろから午後1時ごろまで。午後は家に帰って子どもの遊び相手になったり、奥さんの買い物を手伝ったりできる。夏場の4カ月間だけだが、時給は1600円と高いから、魅力的な副業として人気がある。

——できた米は、どこに販売しているのですか。

杉浦 2021年度の売上高1億1000万円のうち、半分以上が交付金で、ほかに小規模農家の作業受託

収入があり、米の販売収入は2800万円程度しかない。しかも水田の3分の2では飼料米を生産している。主食用米は約20畝でコシヒカリなどを栽培し、収穫量は約1500俵(約90ト)しかない。

主食用米のほぼ全部が直売だ。恵那市内の弁当屋や、地域名物の五平餅屋、それに一般の消費者にも販売しているが、半分近い約700俵は、水田を貸してくれている地主に買ってもらっている。

米作りの作業は私たちに任せても、自分の田んぼでできた米を食べたいし、子どもや親類にも分けてあげたい。そう思う地主が多いのではない。毎年、春のゴールデンウィークの前、夏のお盆の前、それに正月の前には注文が殺到して、精米して届けている。

### スマート農業やGAP

——従業員対策もあって、スマート農業を導入しているとか。

杉浦 高性能な田植え機やコンバインなどの機械を入れている。トラクターにはGPSをつけて直進できるようにしている。またコンバインには、食味計や収量センサーをつけている。農機具メーカーのクボタが開発したK S A Sというスマート農業

システムを活用している。若い従業員は、楽しげに作業している。

同じ規模の経営と比べてみると、トラクターや田植え機、コンバインなど、いずれも他より1台多く所有している。過剰投資ともいえるが、平日に効率よく作業をこなせるので、土日は従業員に完全に休んでもらえる。

——J G A P(農業生産工程管理)の認証も取得しています。

杉浦 G A Pには、さまざまな生産管理をきちんとしなさい、という取り決めがある。従業員にそれを守ることで、事故を防ぎ、品質のいい米の生産につながる。

また、今は飼料用米の生産が主で、助成金の支給を受ける経営をしているが、飼料用米優遇の政策がいつまで続くかわからない。すべての水田で主食用米を生産し、みずから売らなければならない時代が来るかもしれない。そうした時代がきて、有利販売できるようにG A Pを取っておくことにした。

G A P取得はこれから必須の時代になる。早くからG A Pをとっておけば、話題になって従業員の意欲も増すし、採用活動でも有利になる。

### さらなる農地集積が課題

——旧岩村町にある三つの集落営農

組織は、今後どうなっていくのでしょうか。

杉浦 中山間地域直払いは、三つの営農組織が一本化し協定を結んでいて、事務は岩村営農がやっている。だから、三つの営農組織も一緒になったらという人がいる。そうならいいと私も思う。しかし、難しい課題も残っている。飯羽間営農や富田営農の役員を含めた常勤従業員の平均年齢は、70歳前後と高齢化が進み、後継者がいない。労働条件も異なる。

——中山間地域の農業は今後、どういう姿になっていくべきだと思いますか。

杉浦 中山間地域の農業は、規模が小さく、効率的な農業の展開にも限界がある。高齢化し農作業を続けられなくなった農家の農地が、これららどんどん出てくるだろう。ほうっておけば、農地は荒れるがままになる。「担い手」といわれる私たちのような集落営農組織が、そうした農地を集積していくしかない。

草刈りを怠らずに美しい農村景観を守り、少しでも効率的な農業経営で、地域の農業と雇用の場を集落営農組織が守っていかなければいけないと思う。

(ジャーナリスト 村田泰夫)

